

ABIC 国際社会貢献センター Information Letter

No.26 2009年11月

政府機関関連への協力	任期付外務省職員（在外公館職員）としてカンボジアへ	2
	Tranquiloの国—アルゼンチン	4
NPO/NGO等への協力	NPO UNISERVIS セミナー講師体験記	5
自治体・中小企業支援	メキシコ工場進出支援業務を終えて	6
	医療機器商談のイタリア語通訳	7
教育	日本貿易会・ABIC・関西学院大学・青山学院大学共催プロジェクト	8
	1. 第3回高校生国際交流の集い	8
	2. 関西学院大学・高大連携講座 アメリカ理解教育	9
留学生支援	東京国際交流館 国際交流フェスティバルと秋のウェルカムバザー	10
私のボランティア活動	はじめてのABICボランティア体験	11
新刊紹介	『たかが英語、されど英語—日本人の「英語メタボ症候群」の処方箋』	3
事務局だより	会員入会のお願い	12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル6階 (社)日本貿易会内
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5979
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 403号室
Tel & Fax : 06-4395-1188
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

政府機関関連への協力

任期付外務省職員（在外公館職員）としてカンボジアへ

みつくり さとし
三栗 敏（元伊藤忠商事）

外務省の任期付職員に採用され、2008年4月から在カンボジア日本大使館で勤務している。大使館では経済・経済協力班に所属し、草の根・人間の安全保障無償資金協力と地雷除去支援事業を担当している。

カンボジアには、1992年から約4年間、商社の事務所長として駐在していた。当時は治安が悪く、銃の保有が自由で発砲事件が頻繁に起きており不安な生活を余儀なくされた。また、無計画で長時間の停電、濁った水道水、雨が降ると四輪駆動車でなければ走れない道路、水に浸かり不通になる地下埋設の電話等に悩まされたことを思い出す。

17年ぶりのカンボジアは、平和な普通の国に生まれ変わっていた。街は小奇麗な商店が立ち並び活気がある。そして、何よりもカンボジア人の顔が明るくなり、平和の大切さを痛感する。王宮前を流れるトンレサップ川の沿道には飲食店が数多く軒を並べ、多くの旅行者や当地在住の外国人等で夜遅くまで賑わっている光景を見るに、日没後の外出が命懸けだった17年前とは隔世の感がある。

近年、カンボジアは内戦後の復旧、復興から脱してようやく経済成長を実現し、着実な発展を遂げている。1991年10月のパリ和平協定から国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)統治下での国民総選挙を経て、新生カンボジア王国の誕生を舞台裏で支援した日本がさらに復旧・復興に他国をリードする支援を継続してきたことがカンボジアの国造りに役立ったのだと思う。今後の経済発展にはODAに加えて、民間企業の投資による経済活性化が不可欠と思わ



草の根無償資金で支援したクラチク州立病院緊急処置棟の完成式典でテープカット
カンボジア保健省モン・ブンヘン大臣（左）と筆者

れる。今は中国、韓国からの投資が目立っているが、いずれ日本企業がその真価を発揮する日が到来するものと思う。

私が担当している草の根・人間の安全保障無償資金協力は、開発途上国の草の根レベルにおける多様なニーズに的確かつ迅速に対応するための支援である。カンボジアでは1991年より教育、保健、農業、地雷除去等、経済社会開発活動に対しての支援を開始し、2009年3月末までに425案件を実施している。列席した学校校舎完成式典では、会場への沿道では学童たちが日の丸の旗を振って出迎えてくれ、また会場に入ると多くの村人達が胸に手を合わせて歓迎してくれるのを見るに、日本の支援への期待が大きいことを肌で感じる。

カンボジアは世界有数の地雷汚染国である。長期にわたる内戦で無数の地雷が埋められ、その数は400万個～600万個と言われているが、正確な数はだれにも分からぬ。地雷汚染地域は約4,500km²と推測され、地雷の完全撤廃には100年以上かかる。地雷原では日本製の灌木除去機及び地雷除去機が、地雷除去作業の効率化向上に貢献している。

カンボジアは日本のNGO発祥の地と言われる。1980年



草の根無償資金の支援予定現場にて案件事前調査
筆者左端



大使館玄関前にて表敬訪問団と 筆者左から3人目

代後半、カンボジア難民支援で活躍した日本のNGOは、内戦終結後のカンボジアの国造りに各分野で活動している。日本のNGOの皆さんのがんばりには感心させられる。

NGOが企画するスタディー・ツアーや人気である。参加した日本の若者はNGOの活動する現場に数日泊まり込み、生活を経験した後、目を輝かせて帰国すると聞く。日本の若者が、孤児院や学校でカンボジアの子供達からたくましく生きる姿や学校校庭に作ってあげたブランコに子供たちが心から喜ぶ姿に感動するのだと思う。自分の奉仕が人を幸せにする感動が多くの人たちに伝わり、カンボジアへの関心がより広がることを祈っている。



NGOスタディー・ツアーオンに参加の女子大生と質疑応答

カンボジアでの生活面の不安はない。17年前に比べれば、電気も水もあるし、日本の調味料も食材もほとんどのものが買えるようになった。ただし、保健医療には多少不安がある。昨年4月、5月と連続して二人の日本人が亡くなつた。いずれも心臓病であった。日頃の健康管理が大切であることを痛感している。

大使館での仕事は初めてのことでもあり、多少不安を持ってスタートしたが、大使館員の皆さんに支えられて今日まで大過なく過ごしてきた。残された任期は僅かであるが、企業OBが在外公館で働く意義を追い求めながらも任務を全うしたいと考えている。

新刊紹介

『たかが英語、されど英語 —日本人の「英語メタボ症候群」の処方箋』

星野 三喜夫 著（新潟産業大学教授、ABIC会員、元 東京銀行）

発行：パレード 発売：星雲社

ISBN：978-4-434-13566-8 C0082

四六版316頁 定価：1500円（税別） 2009年10月5日発売

本書は、米国勤務や海外出張、国際会議参加等の海外経験豊かな著者が、市民大学講座や勤務する大学の学生向け英語の授業の中の「コーヒーブレイク」で教えてきたものを纏めたものである。

帯に「英語ペラペラ幻想の『体脂肪』を落とす英語シェイプアップ」とあるように、日本人の英語学習を難しくしている原因や、日本人が本当に身につけなければいけない英語表現、英語を習う上で役立つヒント等を中心に、非英語ネイティブで「純国産」の日本人として学ぶべき「骨太の英語」や「英語メタボ症候群」への処方箋が書かれていて、興味を惹く。

5つの章からなる192の項目は、すべて独立・完結していて、どこから読んでも良いようになっているが、独特のユーモアを交えた語り口は、英語参考書というよりは、読者に語りかける「エッセー」に近い。

「shitはハシットナイ」、「had better：～した方が良い、はあまり使わない方が良い」、「『すみません』ではすみません」、「After you. Thank you：お先にどうぞ、ありがとう」、「doggie bagは堂々と」、「『社会の窓』が開いている」、「エイリアン（alien）としての入国審査、ひるむことなけれ」等々。

どれもまさしく「目からウロコ」であり、思わず膝を打ちたくなる。終章は、「英語ペラペラ幻想」を一刻も早く捨てて、非英語ネイティブの日本人として、自分の意見をきちんと伝えられる「骨太の英語」を学ぶ必要性についての著者の熱い思いが貫かれていて、圧巻である。

英語に自信のある人はもちろんのこと、これから英語を本格的に学習したい人や、一度は諦めたものの英語の勉強を再開したいと考えている人に、英語学習の勇気と元気を与える1冊である。

（全国の主要書店ほか、「アマゾン」（送料無料）等の通販で購入可能）



政府機関関連への協力

Tranquiloの国—アルゼンチン

JICAシニア海外ボランティア アルゼンチン貿易振興財団輸出振興アドバイザー

はばかり ただし 羽計 謹(元野崎産業)

2008年3月からアルゼンチン貿易振興財団の輸出振興アドバイザーとして、ブエノスアイレスに駐在している。

広大な国土、豊富な地下資源、ハリケーン・地震・津波などの自然災害があまりないアルゼンチンは、経済発展のための大きな潜在能力を有している。さて、「20年後のアルゼンチンはどのようにになっているだろう?」と聞くと、「何ら変化していないと思う」という。理由を聞くと「だって、20年後も私たちアルゼンチン人が住み続けてるだろうから」。

第二次世界大戦の終わる頃、アルゼンチンは外貨保有で世界のトップを争う一国であった。「南米のパリ」といわれる首都ブエノスアイレスの街をちょっと歩けばそれも納得したような気になる。しかし、現在のアルゼンチンは2002年の国家経済破綻から立ち直りつつあるとはいえ、体感で年20~25%の高インフレ(政府発表では8~9%)、富の分布はGINI係数では0.51と高く、貧富の差の大きい国。都市部には方々に貧民窟(Villa miseria)がある一方、見渡す限り地平線の彼方まで一人で所有している大地主もいる。賄賂、汚職など盛んで、また自国通貨と自国金融機関が信用できず、政府の要人ですら金が入ればすぐ米ドルに換金し、スイスの銀行に預けてしまうとのこと。

当地の人に「どうしてアルゼンチンは低迷してしまったのか?」と聞くと、「アルゼンチンは決して変わっていない。ただ、多くの国々がその後、経済発展し、発展国に加わってしまったが、アルゼンチンは以前と同じであり、ただ相対的に落ちただけだ」との返事。

私は事務所で一般企業の貿易相談にも応じているが、一番多くある相談は「自分のところは、これこれの製品を製造している。輸出をしたいがどこに売り込みを掛ければいい



地方に出張し、訪問した製材所にて 筆者

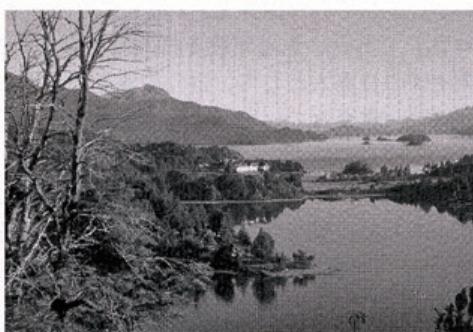
いか分からない。買ってくれそうなバイヤーズリストが欲しい。できたら輸出のための手直しをせず、今の製品をそのまま買ってくれるところがいい。」という類のものである。中小企業やファミリー企業が大半を占めるアルゼンチン、信頼できない政府、信用できない金融機関、輸出税という国内の貿易障壁、手続き書類の煩雑さ、小規模のために需要量を満足できない、ロットがまとまらない等など種々の悩みもあるわけであるが、あせらず、買い手の来るのをじっと待つだけで、自分の製品を“市場の好みや要望に合わせる”というような積極性は薄く、また苦手なようである。

Tranquilo(トランキーノ=無理しない、気楽に)の国アルゼンチン。人々はゆっくりと日々の生活を楽しんでおり、日々のストレスもあまりないようだ。国内には休暇を過ごすのにいいところも方々にある。世界最大のイグアスの滝、南米のスイスと称されるバリローチェ、世界遺産になっているウマウアカの渓谷や月の谷(イスチグアラストの奇岩群)、カラファテの大氷河、そしてつい先日世界遺産となつたブエノスアイレスのタンゴダンスなど。

ブータンの王様が提唱しているGDPならぬGNH(Gross National Happiness)即ち国民総幸福量の指標でアルゼンチンを見れば日本よりかなり上位にランクされている。ストレスを持たず、心に余裕を持ってのんびりと暮らすにはいい国である。



水道局の建物 首都ブエノスアイレスには往年の繁栄を偲ばせるヨーロッパ風の建造物が多く残る



「南米のスイス」と呼ばれるバリローチェ



犬もシエスタ (San Juanにて)

NPO/NGO等への協力

NPO UNISERVIS セミナー講師体験記

あいはら まさかず
相原 正和 (元ニチメン)

ABIC事務局より、「中南米諸国の人々を中心として発足したNPO UNISERVISの創立総会で、彼らを励ます講演をしてもらえないか」とのお話があった。その昔、学生時代にメキシコを2カ月間周遊、現役時代には、現地駐在（カラカス、サンチャゴ等）を通じて、彼の地に親しみ、その素晴らしい歴史、文化、芸術、言語などに深い興味を持ち続けてきた筆者としては、即、快諾させて頂いた。

数日後、ジャネット・ディアス代表、その夫君ディアス・コロンビア大使館2等書記官、協力者の加納女史の3人がABICオフィスに来られ、事務局も交えて打ち合わせた。テーマは「不況下の日本におけるビジネスチャンス」で、「起業」を中心に話して欲しい由。最近の不況により中南米諸国出身の方々も、日本で厳しい現実に直面している背景があり、講演時間は1時間、使用言語はスペイン語とのこと。「日本経済の現状、有望分野、会社設立、会社形式・個人経営形式双方のメリット・デメリット、アドバイス、結論」という組み立てで、レジュメを作成することにした。

7月18日セミナー開催日、1時間前に六本木アカデミーヒルズ49階に到着。開演20分ほど前になると、あちこちから笑い声、「オーラ」というスペイン語の挨拶、現地慣習である激しい「アブラソス」(抱擁)をする音も聞こえ、懐かしい顔や、初めて見る人々に注目。

定刻18:30、プログラム通りスタート。満面に笑みを湛えたジャネット代表が堂々の登壇。NPO UNISERVISの設立目的、経緯、今後の方針等につきスペイン語で基調演説。会場はほぼ満席で、150人程か。コロンビア、ペルー、ブラジル、ホンジュラス、メキシコ、さらにアジアからはフィリピンの方も参加されていた。

いよいよ小生の登場となつたが、「Dr. Aihara、さあこちらへ」との紹介には驚いた。生まれて初めて博士と呼ばれて、苦笑することしきりではあった。種々気を揉んではい



たが、いざ壇上に立つと不思議にも落ち着いて話を始めることができた。出席者の顔を左から右へ、右から左へ見遣りながら、スピーチ原稿も結局、ほとんど見ることもなく、自由奔放に話すことができた。

話し始めて5分も経つと、会場の皆さんとの反応というか、様子を探る余裕が出てきた。皆さん興味津々、真剣に聞いてくれている。自分の経験なども織り交ぜつつ率直な説明をしたが、皆さんには結構、分かり易かったのではないかと、自負している。最後に若干時間が余ったので、私は日々を感じている事を述べた。

「日本は、歴史的にも中南米諸国とは非常に良好な関係を築いてきたし、中南米諸国には、種々の場面で恩恵に浴してきた。自分は、皆さん方に対して、少しでもご恩返ししたいと念じてきたが、今夜の講演はそのささやかな努力の一部であり、この機会に恵まれたのは大変嬉しい」と結んだ。割れんばかりの大きな拍手、近寄って抱き締める人、心から満足し、関係者に「Gracias」(感謝)と言いたい。

今回の講師を務めて感じたことは、ABICの果たす役割の多様性、その深み、重みであり、各層各界へのABICの浸透は、徐々ながら確実に進んでいると感じた。改めて、

日本貿易会、ABIC事務局、会員各位のご尽力に対し、深甚なる敬意を表するとともに、自分もささやかながら、今後も更に何らかの形でお役に立ちたいものだと、強く感じた。



自治体・中小企業支援

メキシコ工場進出支援業務を終えて

たなか てつろう
田中 徹郎 (元伊藤忠商事)

1609年、京の商人田中勝介一行が日本人として初めて現在のメキシコの地を踏んで以来、今年は日本メキシコ交流400周年にあたる。これだけ遠く離れた国同士がこのような古い関係を持つのは世界的にもあまりないのではなかろうか。

また、歴史にIFが許されるならば、1917年、日本とメキシコがドイツの戦略（チンメリマン電報）に応え米国に宣戦布告し、勝っていれば、メキシコは1846年～1848年の米墨戦争で失った領土（テキサス、アリゾナ、ニューメキシコ）を奪回、日本はカリフォルニアとパナマ運河の割譲を受け、日本とメキシコは隣国になっていたと思うと、メキシコと日本の不思議な因縁を感じざるを得ない。

さて、ABICのご紹介でこのメキシコ（及びアメリカ）を舞台とするお仕事をいただいたのは2007年7月であった。メキシコの保税加工制度（マキラドーラ）を利用し、液晶テレビの基幹部品加工のためメキシコに工場進出計画をすすめるS社に対する支援業務である。

工場建設地は、バハ・カリフォルニア州プラジャス・デ・ロサリト（ロサリト・ビーチ）市、米国（サン・ディエゴ郡）との国境ティファナ市（人口150万、メキシコ第7の都市）より27キロ、車で40分程度、人口10万弱のリゾート地である。もともとティファナ市の一部であったが1995年に予算配分でもめたあげく独立した経緯があり、今でも不仲である。

因みに米FOXが、「タイタニック」（アカデミー賞受賞映画）ロケのため1996年にスタジオを開設、これが契機となり、ハリウッドスターなどのアメリカ人が訪れるようになり、観光地として更なる発展を遂げてきたという。

米・メキシコ国境地帯特有の治安問題より、米側サン・ディエゴに居を構え、メキシコに日帰りするというパート



メキシコ公認会計士、税理士と協議する筆者（中央）

ンであった。悪化の一途をたどる組織犯罪に、メキシコ地方警察はコロンビアの警察に支援を要請した。この合意調印セレモニーを報じるTVニュースに接し、コロンビアに長年駐在経験をもつ私はなんとも複雑な気持ちになった。

さて、最初に取り組んだのは工場用地の買収である。メキシコ全土の約51%がいまだにアステカ時代に起源をもつ“エヒド”という共有地に属し、土地売買はきわめて複雑と言われている。S社の工場予定地も個人の所有ながらエヒドの管理下にあり、売買交渉もエヒドの執行委員会が相手となった。一旦合意していた価格が執行委員の交代により撤回され、再交渉より私の出番となった。現れたのは西部劇に登場する悪漢を想起させる趣の強面で、大柄なオジサンが5～6名、一瞬緊張感が走った記憶が鮮明である。

工場用地の次は電力と上下水道の確保。特に水はティファナよりの供給に頼り、ただでさえ水不足にあるロサリトだけに難航した。次にマキラドーラの政府認可申請を取り組んだ。認可取得には最悪2～3ヶ月かかる、素人には無理、弁護士事務所なり専門業者にまかせるべきとの周辺からの圧力の中、直接、州経済省担当局長に当たり、これなら自分できるとの確信を得て独自に申請手続きを進め、幸いにも2週間程度で許可が下りた。

2007年9月、整地工事を開始、半年後の2008年3月末には工場稼働にこぎつけたが、クリティカル・パスはマキラドーラ許可取得にあったと言っても過言ではないと思う。

工場稼働後はS社アメリカ会社を拠点とし、主に法務・会計・税務面（アメリカ会社業務を含め）での支援を続けたが、2009年8月末をもって2年に亘る業務を無事終了した。

私の知見・体験をもとに活躍できた有意義な2年間であった。ABICとS社にこの誌面をお借りしてお礼申し上げる。



ロサリト・ビーチ

自治体・中小企業支援

医療機器商談のイタリア語通訳

にしづわ しゅんいち
西澤 俊一（元丸紅）

私のイタリア語との付き合いは学生時代から50年以上にもなるが、通算12年間のイタリア駐在を終わり、さらに定年を迎えた後は、年々イタリア語を話す機会も減り、最近では年に3~4回の展示会参加程度になっている。

そんな状況下で2009年9月16日、17日の2日間、ABICからの依頼で、千葉県船橋市の(株)ニチオンとイタリア(ヴェローナ市)の医療機器メーカーAT-OS社間の商品・技術説明の日伊語通訳業務にあたった。

ABICでは、これまでボランティアとして、2007年沼津市での技能五輪、2009年4月横浜での世界卓球選手権の2回参加しているが、いずれも接した選手・役員が多数でそれも陽気なイタリア人だったので比較的気楽な気分で業務にあたることができた。しかしながら、今回は真面目な社長と律儀な技術者が相手で、かつ用語、質疑内容が高度に専門的であったことから、日々に長時間緊張を強いられる実務支援となった。

対象の機械は病院などで発生する汚物の回収容器を自動的に洗浄、消毒するという特殊な分野でのもので、近年の院内感染の防止、環境問題への対応などからこの種の医療機器への需要は高まっており、欧州、とりわけイス、オーストリア、ドイツなどでは医療機関よりの引き合いも活発、かつ機器の開発競争が繰り広げられており、同様な動きの日本においてニチオンは業界トップの位置を占めている企業である。

医療機器に関する業務とは聞いていたので、「汚物」「洗浄機」「(水の)跳ね返り」「院内感染」等々日常会話では余り使用されない単語についてそれらのイタリア語を頭に入れていたのだが、事務所到着直後の技術・営業担当へのフィルムを使っての説明・質疑応答で、早速ISO条項第何条(にある...)、座金、希釈剤、等々それこそ想定外の技術専門用語が数多く飛び出し厳しいスタートとなつた。初対面の挨拶で、AT-OSの社長は「イタリア人でも我々の話はなかなか理解しにくいし、これまで働いてきた



事務所にて打ち合わせ 筆者（中央）

分野が異なれば使われる単語はなおさら難しいと思うよ」と言ってはいたが、正にその通りの展開であった。

倉庫で前日到着した機械のちょっとした不具合につき協議を行なった際には、顧客への納期問題を心配するニチオン、その対応策に追われるAT-OS社、双方が時間を争っての打ち合わせとなり、私もかなり忙しい事態になったが、両者が知恵を出し合い、問題は解決に向かった。限られた時間内のやりとりは見事であった。

機械を前にしての質疑は翌日も行なわれたが、日伊双方がより良い機械の顧客への提供という点で大変真剣なやりとりを続け、時にはイタリア側の技術者が色をなして私に話す場面も出てくるなどしたが、結果としてはお互いに有益な議論になったようである。

今回の業務で、イタリア人も日本の若い人達も私達の現役時代と少しがうなと思った点を挙げると、1. 企業によるのかもしれないが、議論は真剣だが両社とも相手に余計な気を使うことが少なく、ごく自然な態度で臨んでいたこと。昼食にはニチオンが用意してくれたパニー（丸型のパンで中にソーセージやハムを挟んだサンドイッチ）を皆でぱくつき、時々仕事の会話が挟まるといった慣れ親しんだ雰囲気であった。〈昔は色々考えすぎたのかも...〉2. AT-OS社が接する場面すべてで、大変時間を大切にしつつ正確でニチオン側とよく波長が合っていたのが、両社の信頼関係を醸成する一つの要因であったとの印象を持った。〈昔はイタリアの時間意識に悩まされたことも多かつたので...〉

2日間にわたり、お互いの言うことに耳をすませ、出てくる専門用語を反芻しながら会話を進めるのはさすがに疲れたが、日伊両社の若手技術者が機械にかける意気込みと常により良いものを求める姿勢には感銘を受けたし、将来にわたり両社がその分野で発展していくと強く感じた業務であった。



倉庫にて機械を前に技術的な協議

教 育

産学共同プロジェクト

日本貿易会・ABIC・関西学院大学・青山学院大学共催 プロジェクト

1. 第3回高校生国際交流の集い

日本貿易会並びにABICは関西学院大学（7月24日、25日）、青山学院大学（7月25日、26日）と第3回高大連携プログラム「高校生国際交流の集い」を開催した。

今回は、米州、ヨーロッパ、アジア諸国からの留学生も参加して、大学生ボランティアが企画から運営まで中心的役割を担いつつ高校生をリードし、大学教授、社会人が側面支援を行う産学協同の試みとして、日本と米州、ヨーロッパ、アジア諸国の高校生が寝食を共にして語り合う国際交流の場を提供した。

関西は米国領事館（大阪・神戸）、民間国際教育交流団体のAFS大阪支部、関東は米国大使館・広報文化交流部、AFS日本協会東京支部が協力団体で参加した。

関西（7月24～25日）

関西学院大学上ヶ原キャンパスを会場に「We are one 一友に会い共に知ろう」をテーマに開催した。参加高校生は、兵庫県立宝塚西高等学校、兵庫県立国際高等学校、大阪府立箕面高等学校、大阪府立千里高等学校、私立啓明学院高等学校、関西学院高等部から計41名、AFS短期、長期留学生総数は18名、国籍数は昨年より増えて、米国、ボリビア、イタリア、フィンランド、ブルガリア、インド、スリランカ、タイ、インドネシア、フィリピン、香港 計 11ヶ国。

初日は、関西学院大学浅野副学長の開会の挨拶、グループベル関西学院院長の講演、駐大阪・神戸米国総領事館関西アメリカンセンターのヘッケンバック館長によるユーモア溢れる講演があった。開会直後のレクレーションを通じ、参加者は直ぐに互いに打ち解け、「伝統」、「流行」、「趣味」、「学校生活」、「恋愛」、「家族」をテーマとした6グループに分かれ、大学生の指導によりディスカッションを行った。

2日目もグループディスカッションを続け、午後にグル



関西 参加者

勤講師大西加奈子氏によるウィットに満ちた英語での講評、名鏡ABIC事務局長と橘プロジェクトスタッフも審査に参加して採点評価を行った。修了式では名鏡ABIC事務局長による優秀グループの表彰、浅野関学副学長による修了証の授与、閉会挨拶が行われ、更に茶話会では、大学生が編集した期間中のスナップ写真が次々とスライドで映し出され、全員が楽しい思い出を共有できた。参加者は互いに別れを惜しみながら散会した。

関東（7月25日～26日）

昨年、一昨年に引き続き、丸紅(株)の協力により丸紅多摩センター研修所で、「Love the difference」の主題の下にグループ毎に独自・個別に討議テーマを決め、討議をした。

参加した高校生は、横浜市立横浜商業高等学校、東京学芸大学附属高等学校、青山学院高等部、埼玉県立浦和高等学校、神奈川県立相模原高等学校、私立横須賀学院高等学校から日本人30名、アメリカ、カナダ、イタリア、スウェーデン、ブルガリア、香港から来日中のAFS交換短期留学高校生16名の計46名。リード役は青山学院大学大学生、AFSボランティア大学生の計10名である。

初日は、天野日本貿易会専務理事の開会挨拶の後、アメリカ大使館広報・文化交流部のレーヴェン・ムーア氏が「Thirst」と題し、世界の喫緊の課題である水資源枯渇化傾向について警鐘を鳴らす、時宜を得た英語スピーチを行い、



関西 グループ発表会



関東 最優秀として表彰されたグループの発表

好評であった。午後は貿易ゲームを通して全体の融和と連帯感の醸成を図った。その後夕食を挟み2回のグループディスカッションでグループ毎に個別テーマを決め、全体に公開した。夕食後は3回のグループディスカッションを午後10時まで行った。

2日目、朝食後のスポーツレクリエーションはドッジボールで連帯感を高めた。午前中グループディスカッションを1回行い、更に昼食後まとめのグループディスカッションを経て、グループごとに英語で発表。参加高校生全員による投票で最優秀グループを選び、名鏡ABIC事務局長から表彰ならびに賞品が授与された。続いて長谷川青山学院大学副学長による講評、三幣日本貿易会常務理事兼ABIC



関東 参加者

理事長の閉会挨拶、参会者全員の記念撮影後、交流会を経て散会した。

(高校生国際交流の集い担当 大西 俊男、橋 弘志、角井 信行、川俣 二郎)

2. 関西学院大学・高大連携講座 アメリカ理解教育

2006年パイロット授業として始まった高大連携授業は、今年で4年目を迎えた。今年は、8月3日～6日の4日間に亘り関西学院大学上ヶ原キャンパスで実施された。

【特別講演】

駐大阪・神戸米国総領事館 アイダ・ヘッケンバック
関西アメリカンセンター館長
「アメリカ南部地方の歴史とそこに住む人々について」

【講師陣容と講演】

関西学院大学 杉山直人 経済学部教授
「南部 奴隸制と公民権運動」
同 増永俊一 経済学部教授
「ニューアングランド
アメリカ合衆国の起源：植民地時代とその後」
同 平山健二郎 経済学部教授
「ニューヨーク ウォール街とアメリカ経済」
同 塚田幸光 法学部准教授
「ハリウッド映画とネイティブアメリカン」
同 スティーブン・シルバー 経済学部英語常勤講師
「フロリダ ヒスピニック系アメリカ人とその文化」
摂南大学 家本真実 法学部講師
「ヒップホップ音楽について」

ABIC 横館久宣 会員 「ジャズについて」

森川建夫 会員 「サブプライム問題と金融バブル」

【受講生】

大学生は関西学院大学計8名、高校生は計16名（兵庫県立宝塚西高等学校、大阪府立箕面高等学校、関西学院高等部）参加。今年は、大学生2名、高校生4名で1グループ、計4グループを形成し、聴講後、グループに分かれて、最終日に行うプレゼンテーションテーマを自ら設定し、毎日グループディスカッションを行う形式となった。高生共に聴講により得た知識をベースに、関心事項を整理する一方、大学生は、高校生に対しプレゼンテーションを指導する立場を経験する機会でもあった。関西学院大学側リーダーの杉山教授と宝塚西高校の鈴木教諭が、事前に大学生に対し高校生指導の要点を指摘、準備されたことが、今回本講座の効果を高めることに結びついた。

最終日にグループ毎にプレゼンテーションが行われた。関西学院大学講師、参加校教諭、ABICメンバーが各グループの発表結果を審査した結果、「ベトナム戦争と反戦運動」をテーマとしたグループに杉山教授より優秀グループ賞品が授与され、参加高校生全員に高大連携授業の修了証が授与された。出席された高校教諭から一様に本講座に対する教育効果と謝意が表明され、天野日本貿易会専務理事、浅野副学長の閉会挨拶をもって、連携講座は成功裏に終了した。

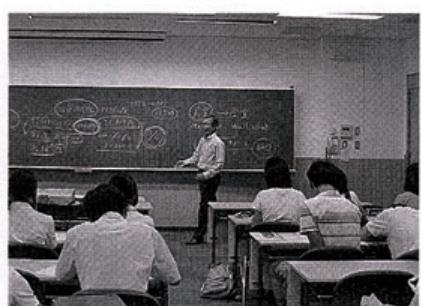
(関西デスク 大西 稔男、橋 弘志)



開会式にて ヘッケンバック関西アメリカンセンター館長と杉山教授



横館ABIC講師



森川ABIC講師

留学生支援

東京国際交流館 国際交流フェスティバルと 秋のウェルカムバザー

留学生とその家族約1,000人が住む東京国際交流館では8月15日(土)に「2009東京国際交流フェスティバル」が開催されました。長年バザーとともに秋に開催されていた秋のフェスタと7月に開催されていた盆踊りが合体して、昨年から夏のイベントとして生まれ変わりました。バザーは例年通りに9~10月に入居する留学生の便宜を図って10月17日(土)に開催しました。

国際交流フェスティバル

8月15日のフェスティバルは3,300人を超える参加者を迎えた大規模なものになりました。屋内会場では民族楽器体験コーナーや世界のおもちゃ体験コーナー、日本のお正月遊びや縁日コーナー、日本からくり人形展、アジアン着付け体験コーナー、講演会や討論会に各種ステージパフォーマンス、日本文化体験コーナーなど、また屋外では留学生を中心に企画した世界のグルメ屋台や世界のコールドスイーツ＆ドリンクフェアなど、盛りたくさんイベントが



書道体験教室



書道体験教室

終日続きました。夕刻からは中庭に設置された檜を囲んで留学生やその家族に来賓や一般参加者が合流して、盛大な盆踊りを楽しみました。

ABICは日本文化体験コーナーを担当し、日本文化教室の講師の先生方や普段の教室で習っている留学生達またボランティアの方々の協力も得て、華道、書道の展示やデモンストレーションと留学生や一般参加者向けの体験教室を開きました。華道、書道の体験コーナーではそれぞれ110名、80名を超える多数の参加者があつて、関係者は忙しさに嬉しい悲鳴でした。

また盆踊りに参加する留学生や家族58名に浴衣を貸し出し、自前の浴衣を持っている者を含む70名の着付けをABICのボランティアチームメンバーが指導し、大変喜ばれました。

秋のウェルカムバザー

10月17日(土)、ABICの留学生支援の拠点であるお台場の東京国際交流館では、新入館留学生とその家族の便宜をはかることを主目的として、恒例の秋のウェルカムバザーが開催されました。

当日は、曇り空でしたが、バザーの他テント屋台なども加わって中庭一杯に繰り広げられ、参加者は、在住日本人学生、室長を先頭とする管理センター職員などがそれぞれのテントで調理して提供するB級(?)グルメを楽しみながら交流し、夜は館内で歓迎パーティーが開かれました。

ABICはバザーに参加し、会員、日本語や文化教室の講師有志、ボランティアチームメンバー、留学生支援コーディネーターが留学生やその家族、

外部からの来館者との交流を深めました。

バザーでは、200を超える支援企業、社員の方々や日本貿易会職員、ABIC会員から300箱以上の品物を寄贈いただき、売り上げは23万円を超みました。これは従来通り交流館の留学生のイベント支援などに充てられます。ご支援いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

(ABIC留学生支援グループ)



私の
ボランティア活動

はじめてのABICボランティア体験

にしかわ ゆうじ
西川 裕治（日本貿易会 広報グループ部長、ABIC活動会員）

ABICの評判を聞き、日本貿易会広報責任者として実態調査(?)をすべく会員登録したが、はじめてABICのボランティア活動を体験したのでご披露したい。

10月11・12日、日本英語交流連盟（ESUJ）は、第12回大学対抗英語ディベート大会を、代々木にある国立オリンピック記念青少年総合センターで開催し、全国28大学から選りすぐりの32チームが参加した。英語の入試問題がやたら難しい名門大学も多く参加しており、ハイレベルな戦いが期待された。

ディベートChairperson (Cp) のお仕事

ABICは2002年より同大会にボランティアを派遣して支援しているが、今年は7名が参加しCpを務めた。Cpの仕事は特に難しくはなく、試合開始の宣言から始まり、審査員の紹介、Motionと呼ばれる「議題・争点」の確認、そして、発言者の指名などだけだが、Cpの存在感次第でディベートの雰囲気がビシッと引き締まる。

当然、使用言語は英語だが、最近、本業で英語を使う機会が少なく、昔の流暢な英語(?)が戻るまで時間がかかる（結局、最後まで戻らなかったが）。

今回の大会は、英国議会での論戦を模して、各チーム2人制で、Motionに対する賛成派（Proposition）と反対派（Opposition）に分かれて戦う。

試合の審査では、英語の流暢さも大事だが、むしろ論理構成や事実認識、また、相手の論点をきちんと否定したかなどの点が高く評価される。

各チームは、毎回の試合でMotionを知らされると同時に、賛成派、反対派のどちらになるかが指定され、選ぶことはできない。因みに、Motionは毎試合異なり、選手には幅広い時事問題の知識が要求される。そこから20分間で、指定された側の立場に沿った情報を整理し論理構成を行ない、適切な英語表現も調べる。

討論は、双方が各3回行い40分程度続くので、準備時間20分との合計で1試合は1時間程度となる。Cpは、途中で気を抜くと、発言者や賛成派と反対派を間違えてコールする恐れもあり緊張する。

各ABICボランティアは、予選（11日）の4試合を担当するが、待ち時間を含めて一日仕事となり、けっこうくたびれる。私も学生時代に英語ディベート大会に出場した経験があり、多少の土地勘はあったが、遠い昔の話であり、かつCpは初めての経験なので意外と



草食系VS肉食系？

気が抜けない。

予選第1戦のMotionは「全ての高速道路を無料化する」だ。試合室にいる観客や応援団を意識しつつも、司会進行は手元に隠したメモを棒読みする形でなんとか無難にこなした…と自分では思っている。正直、明らかなミスやトチリもあったが。

今ドキッ！の大学生

大学生の発音や語彙のレベルは、さすがに全国大会に出てくるチームだけあって、それなりに高い。明らかな帰国子女もいる。一方、事実認識や論理構成は、さすがに「学生さん」らしく、社会経験の不足が十分に感じられ「もう少し勉強せんかい」としばし優越感に浸る。（こんな事で年配者が威張ってみても仕方ないのだが。）

試合では、美形の肉食系女子選手が細身の草食系男子を圧倒したり、リードしていたのが今日的だった。一方で、文化会系クラブ活動には珍しい肉食系男子（いわゆる珍獣）も数匹（失礼）おり、少しだけ頼もしく思えた。ただ、肉食系男子と言っても、鶏のささ身か白身魚の切り身程度の“淡泊系好み”かもしれないが。

私が担当した8チームの内の2チームが翌日のベスト4に残り、更に1チームは決勝戦まで進んだ。予選のCpの進行がよほど上手かったに違いない。

絶好の行楽シーズン3連休を棒に振った見返り

今回ボランティア活動に参加し、秋晴れの2日間を屋内で過ごす羽目になったが、久しぶりに学生達の真剣な意欲と熱気に触れ、日本の将来に（すなわち我々の老後に）微かな光明を見たような気がしたのが何よりの救いだった。がんばれ若造達よ！…お願ひだから。

会員入会のお願い

国際社会貢献センター（ABIC）の活動にご賛同頂き、会員として資金的援助をしていただける個人の方や企業、団体のご入会をお願い申し上げます。

種類	内容	年会費
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体 一口 50,000円
		個人 一口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。	法人及び団体 一口 10,000円
		個人 一口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要 一 一

正会員

団体・法人(17社)	(社名五十音順)			
〈10口〉 (社) 日本貿易会	伊藤忠商事(株)	住友商事(株)	双日(株)	
豊田通商(株)	丸紅(株)	三井物産(株)	三菱商事(株)	
〈4口〉 倍日立ハイテクノロジーズ				
〈2口〉 稲畑産業(株)	岩谷産業(株)	長瀬産業(株)	阪和興業(株)	
〈1口〉 協同材木貿易(株)	興和(株)	JFE商事ホールディングス(株)	蝶理(株)	
個人(7名)	(敬称略・入会順)			
池上久雄	寺島實郎	小島順彦	宮原賢次	吉田靖男
				岡素之
				佐々木幹夫

賛助会員

法人(3社)	(社名五十音順)	
(有)イーコマース研究所	(株)エックス・エヌ	キーリサーチネット(株)

個人(393名)

下記は2009年7月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力に深謝申し上げます。 (敬称略・氏名五十音順)

〈4口〉 上中庸隆				
〈2口〉 志岐明弘				
〈1口〉 伊藤栄太朗	井上良彦	射場和行	植田俊	扇文子
	小川洋志郎	坂上恵一	篠田正義	杉山博
	竹田信志	橋弘志	田中徹郎	中島宏機
	野津浩	林進	藤井健一郎	星野和俊
	光山武志	村瀬憲治	山田恭暉	吉田房子
	渡邊健三			鷺頭三郎

活動会員 1,950名

(2009年10月末日現在)

e-mailアドレス・住所等の変更届けはお忘れなく！

e-mailアドレス・住所などの変更がありましたらご連絡ください。
転居先不明で返送される例が増えています。

e-mail : mail@abic.or.jp FAX. 03-3435-5979